令和５年度「青少年の主張宮崎県大会」審査結果一覧

■　少年の部

成　績	氏　　名	学　　校　　名	学年	題　　名
最優秀賞	横　山　恵　都	宮崎西高等学校附属中学校	2	自分らしく生きる
優 秀 賞	佐　藤　弘　空	綾町立綾中学校	3	戦争を知る
	茂　田　　庵	国富町立八代中学校	3	今の自然を守るために
優 良 賞	柿　本　知　花	宮崎市立赤江中学校	2	今日は何が食べられるのか
	椎　葉　光　珠	椎葉村立椎葉中学校	2	これからの椎葉村のために
	小　嶋　ももか	宮崎市立生目南中学校	2	好きなことを通して考えたこと
	寺　脇　倖　穂	国富町立本庄中学校	3	魔法道具スマホと人間
	河　野　　楓	川南町立唐瀬原中学校	3	魔法の言葉
	今別府　大　聖	高原町立高原中学校	2	後悔しない生き方
	井野元　凜　桜	鵬翔中学校	3	知らない世界を知る日

※　優秀賞及び優良賞の記載順は発表順です。

■　青年の部

成　績	氏　　名	学　　校　　名	学年	題　　名
最優秀賞	内　田　菜　月	宮崎学園高等学校	3	「私」に会いに
優 秀 賞	岩　本　継　夢	高鍋農業高等学校	2	農業で生きていけるふるさとをめざして
優 良 賞	ウォーカーリオ	福島高等学校	1	今を生きる者として

※　青年の部で発表する予定の１名は、大会当日欠席しましたので３名が発表しました。

文書取扱：（公社）宮崎県青少年育成県民会議（県こども家庭課内）　TEL. 0985-26-7041

自分らしく生きる

少年の部
最優秀賞

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　２年
横山（よこやま）　恵都（けいと）

私の名前は「恵都」だ。両親が心を込めてつけてくれた唯一無二のこの名前が私は好きだ。

この名前は私にとって「自分らしさ」について考えるきっかけを与えてくれたものでもある。小学生のころ、先生がみんなの名前を一人ひとり呼んでいった。そして私の番になった時、私は自分の耳を疑った。先生が私を「恵都君」と呼んだからだ。戸惑う私に、友達が言った言葉を今でも覚えている。

「だって男の子みたいだよ、けいとっていう名前。」

衝撃を受けた。私自身は男性のような名前だと感じたことなどそれまでなかったが、私の名前は周りの人にはそう思われていたのだろうか。その時は曖昧に受け流したが、胸の奥にもやもやしたものが残った。

その後も同じように間違われることやからかいで君付けされることが何度か続き、そのたびに私は自分の名前に自信がもてなくなっていった。相手に悪気はなくても、君付けで呼ばれると、自分が自分でないような気がして強い違和感を覚えた。そして、「こんな名前ではなくて、もっと女の子らしい名前だったら良かったのに」という思いがどんどん積もっていった。

幼稚園に通っていたころの私は、よく外で遊ぶ活発な性格で、男子とも喧嘩していた記憶もある。自分がいいと思えば、周りと違っていても押し通すような気の強さもあった。けれど、私のそんな一面は「女の子らしくない」と思い、控えめでいることを心がけるようになり、私は周りから浮かないように、おとなしく日々を過ごすようになっていった。

そんなある日、偶然出会った言葉が私の心に響いた。「「自分らしく」を一番に」これはLGBTQの方のインタビューにあった言葉だ。私はそれまで、LGBTQの人々に対して少し壁を感じていたが、インタビューを読むうちに、性別という枠に囚われないその人らしい生き方が眩しくみえてきた。「男らしく、女らしく」ではなく「自分らしく」。その考え方は、私にはなかったものだった。

それから、私は少しずつ自分の心のままに行動するように心がけてみた。そうすると、いろいろなことが気にならなくなっていった。今、私には女子と同じくらい男子の友達がいるし、学校ではスカートではなくスラックスをはくことも多い。スラックスをはいている女子は学年に数人なので、初めてスラックスで登校した時は少し緊張したが、みんな「スラックス、似合うね」と言ってくれ、私はそのことを素直に嬉しく思った。自分らしく過ごす毎日は、とても楽しく充実している。

「自分らしく」という言葉に出会い、もう一度自分の名前について考えた。恵都というこの名前は人によっては女の子らしくないと感じられるかもしれないが、私にとって最高に自分らしい名前だ。私は今、この名前で良かったと心の底から思っている。

今後「恵都君」と呼ばれることがあったとしても、もう気にしない。私は私として、胸を張って生きていきたい。そして、違いや個性に触れた時、それを固定観念の「らしい、らしくない」という見方で判断するのではなく、それがその人らしさ、その人である証なのだとそのまま受け止める自分でありたい。人はみんな違う。違うからこその良さがあり、だからこそ世界が色鮮やかなのだと思う。「違う」ということに対する恐れや偏見はすぐにはなくならないかもしれない。だが、自分一人でもそう考えることが壁を取り払う第一歩となると信じている。誰もが個性をいかし、自分らしく生きることが当然とされる社会が創られること、それが私の願いだ。

「私」に会いに

青年の部
最優秀賞

宮崎学園高等学校　3年
内田（うちだ）　菜月（なつき）

「私ね、夢があるの。」

通学中に出会ったおばあさんのこの一言に、私はドキッとした。そのおばあさんは、退職した旦那さんと世界中を旅することが夢だと言う。

なぜ、私はドキッとしたのか。それは、その時「自分は将来どう在りたいのか」という、18歳の私には答えを出すことが難しい、答えのない問いと戦っていたからだと思う。学校で毎週のように行われる進路希望調査。それが私には苦しかった。自分の夢についての決断の期限を迫られているような気がしたのだ。

自分自身の在り方さえも、見失いかけていた私は、夢や目標が決まっている友達が羨ましくてしかたがなかった。目標に向かって努力する姿は、キラキラしていて、眩しかった。

私の悩みは、一般的には深刻な悩みではないだろう。しかし、18歳の私にとっては、とても大きな問題だった。

そんな時に出会った一人のおばあさん。何歳になっても向上心や目標を持ち続けるその姿は、とてもキラキラしていて、私に勇気を与えてくれた。

その後、おばあさんに「将来の夢はあるの」と尋ねられ、私は躊躇いながらも「まだ決まっていない」と伝えた。すると、おばあさんは「それは急いで決めるものじゃない。ゆっくりと時間をかけていいのだよ。」と言った。私は一瞬耳を疑った。なぜなら、その言葉は、今の私が一番必要としていたであろう言葉だったからだ。この言葉は、自分のアイデンティティについて悩んでいた私を助けてくれた。そして、その一言は、私の普段の生活を色鮮やかなものに変えてくれた。悩んでいた頃は気が晴れなかった学校生活も、今ではとても充実している。

「おはようございます」の言葉とともに校舎に向けて一礼をする。これは私の通う学校での毎朝のきまりであり、私の一日のスタートだ。おばあさんの言葉を聞いた次の日の朝、いつも通り一礼をし、顔を上げた瞬間、今までに見たことのないほどに青く晴れた空が目に飛び込んで来たのを覚えている。その時、おばあさんが私の背中を押してくれているような気がして、とても嬉しかった。

18歳。それは、大人でもあり、子供でもある時だと私は思う。昨年から成人年齢が20歳から18歳に引き下げられ、法的には成人と認められているが、心が追いつかず、私のような悩みを抱えている人も少なくないだろう。そのような人たちに私は伝えたい。自分自身の在り方や、将来について、すぐに答えを見つけ出す必要はないということを。

今、私には「自分のなりたい自分になる」という目標がある。そして今、この目標を達成するために、自分探しの旅に出ている。自分は何がやりたいのか、将来どう在りたいのかという答えのない問いと最後まで戦い抜きたい。

「さあ、冒険の始まりだ。」